

青年・成人期にある発達障害者の運動能力

車谷洋¹⁾、深津玲子¹⁾、四ノ宮美恵子²⁾、水村慎也²⁾、小林菜摘²⁾

1) 国立障害者リハビリテーションセンター 研究所 発達障害情報センター

2) 国立障害者リハビリテーションセンター 自立支援局

【はじめに】

学童期にある発達障害児は身体的な不器用さがあり、運動能力が低い傾向にあるとの報告は散見される。また、青年・成人期にある発達障害者（以下、青年期発達障害者）においても、身体的な不器用さがあるとの報告もある。

著者らは、青年期発達障害者に対して就労支援を実施する中で、身体的な不器用さだけでなく、体力や運動能力が低いと考えられる状況もしばしば経験する。しかし、青年期発達障害者の運動能力を調査した報告はなく、その傾向は明らかにされていない。

よって、本研究の目的は、青年期発達障害者の運動能力を調査することである。

【対象と方法】

青年期発達障害者6名（男性5名、女性1名）を対象とした。対象者の年齢は23.0±2.4歳、診断名は特定不能広汎性発達障害が4名、アスペルガー障害が1名、自閉性障害が1名であった。学歴は専門学校卒業が2名、短期大学中退が1名、大学中退が2名、大学卒業が1名であり、職歴はアルバイト経験もない者が4名、アルバイト経験のみの者が1名、常勤経験のある者が1名であった。知能検査結果はVIQが70-116、PIQが54-110、FIQが60-116であり、全例VIQがPIQより高かった。

これらの対象者に対して、運動能力の調査を実施した。運動能力の調査には、文部科学省が実施している体力・運動能力調査の新体力テスト（20-64歳対象）および観察による動作遂行能力の評価を用いた。

体力・運動能力調査の新体力テストは、握力、上体おこし、反復横跳び、長座体前屈、立ち幅跳び、急歩の6種目で構成され、得られた結果は、同年代の平均値と比較した。

観察による動作遂行能力の評価は、青年・成人期では動作遂行が可能である歩行、横歩き、継ぎ足歩行、スキップ動作などを行い、その動作遂行の可否を調査した。

【結果】

体力・運動能力調査の結果より、対象者の運動能力は同年代の平均値よりも低い傾向であることが明らかとなった（図1-6）。また、動作遂行能力の結果から、60～72月齢で達成可能である継ぎ足歩行やスキップ動作が困難な者がいた（表1）。

表1 動作遂行能力

	動作可能	動作困難
歩行	6	0
横歩き	6	0
後歩き	6	0
継ぎ足歩行	4	2
スキップ動作	2	4
片脚ケンケン(10回連続)	6	0

(人)

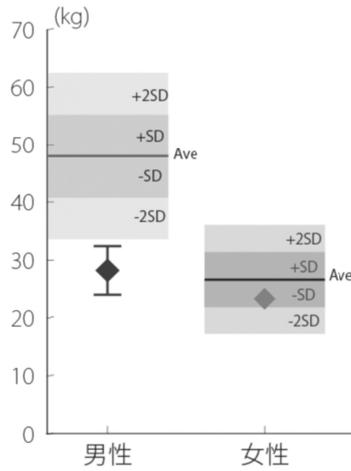
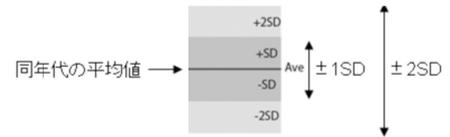


図1 握力

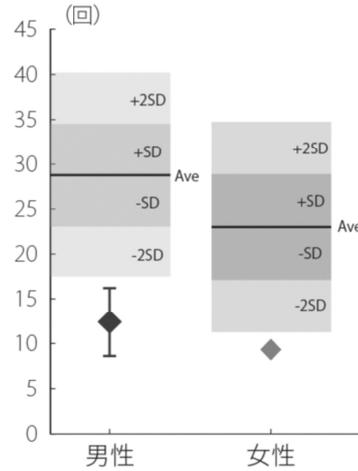


図2 上体おこし

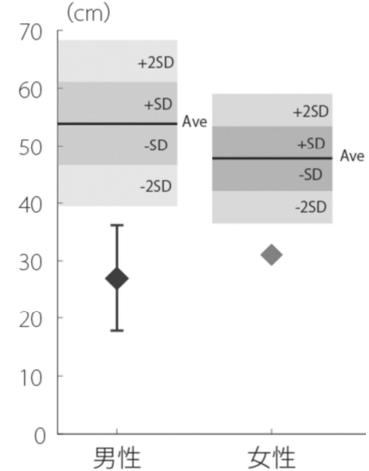


図3 反復横とび

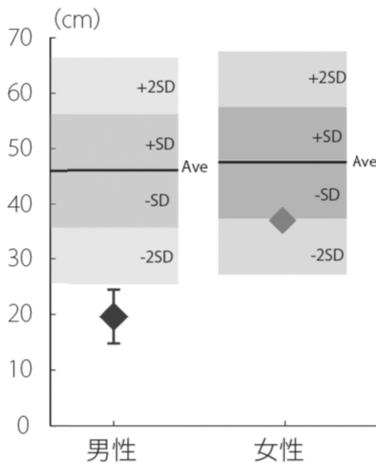


図4 長座体前屈

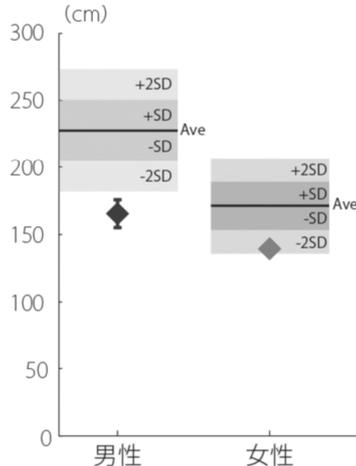


図5 立ち幅跳び

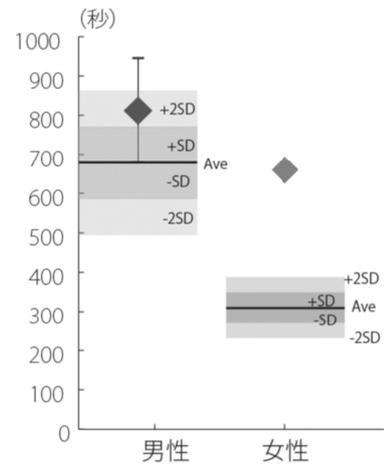


図6 急歩

【まとめ】

青年期発達障害者の運動能力は、同年代の平均的な運動能力よりも低い傾向であることが明らかとなった。また、体力・運動能力調査の各項目で同年代平均値よりも低い傾向を示したことから、青年期発達障害者の運動能力は同年代よりも全般的に低い傾向があると分かった。また、低年齢で動作遂行が可能な動作が行えていない者がいた。以上より、青年・成人期にある発達障害者への介入時には、運動能力への評価および介入も必要であると考えられる。